

## 『水辺の森公園』

稲森（いなもり）

父

母

木の下ベンチ。父と母がいる。

父「これサルスベリかな。」

母「『シマサルスベリ』って書いてある。」

父「よかね、こんなに枝の広がれば。うちのはブチブチ切れとるから。」

母「つつるしてる。」

波止場を散歩していた稲森が戻ってくる。

稲森「何も釣れませんって言われた。」

母「何が。」

稲森「釣りのおじさんに何が釣れますかって訊いたら、何も釣れませんって。「でじま」で書いてある船ん手前にいるおじさん。」

稲森、巡視船でじまの手前で釣りをしている男性を指す。

男性は時折、餌を海に撒きながら釣り糸を垂らしている。

稲森「下見たら何かうじゃうじゃいるんだけど、何の魚かわからない。」

父「撒き餌で寄ってくるんやろ。ほら、また撒いとる。」

稲森「何だろ、あの魚。」

母「もう一回訊いてくれば？」

稲森「釣れませんって言われたのに、もう訊けない。」

母「釣れるでしょ、そのうち。」

稲森「訊き方が悪かったんかな。何が釣れる予定ですか？て訊いた方が良かったんやろか。」

父「どっちでん一緒やろ。」

稲森「・・・結構ひとがいるね。」

母「ね、久しぶりに来たわ。犬連れとるひとの多かね。」

父「プードルがプードルに吠えとった。」

母「ああ、さっきね。」

稲森「おばあちゃん、もう鹿児島着いたかな。」

父、腕時計を見る。

母「乗り換え大丈夫やったやろか、お義母さん。」

父「来れたんだから大丈夫よ。もう鹿児島に着く頃やろ。」

母「ならよかけど。」

父「佐恵子も駅で待っとるし。」

稲森「佐恵子おばちゃん軍艦島行ったんでしょ。」

父「去年な。バスンツアーで。」

母「佐恵子さん連絡くれればよかったのに。」

父「ツアーだと自由に行動できないんだよ。」

母「なんでツアーで来たんやろか。」

父「そりゃあ軍艦島目当てだからだろ。そっから船が出とっとよ、たしか。」

父、反対側の波止場を指す。

稲森「佐恵子おばちゃん、『故郷を見た気がした』って言ったらしいよ。」

父「なんだ、それ。」

稲森「おばあちゃんが言った。船から軍艦島が見えたときにそう思ったんだって。」

父「故郷は鹿児島やろ。」

稲森「感覚よ感覚。」

父「なんだ、それ。」

母「ふふふ、佐恵子さん、好きだから。」

父「何が。」

母「そういう場所が。」

稲森「前、写真集見せてもらったことあるよ。」

母「ね。」

父「何の。」

稲森「軍艦島の。あと、九龍城とか廃墟のとかいろいろ。」

父「ははは、香港も故郷か・・・。」

稲森「わたし佐恵子おばちゃん好きよ。」

母「気が合うんでしょ。同じ干支だし。」

稲森「干支は関係くない？」

父「同じだったか？」

母「たしかそうよ。ちょうどふたまわりちがうの。うさぎどし。」

父「そうか。」

稲森「今日船いないね。毎日とは出とらんのかな。」

母「あ、ミホが手伝っとる子ども合唱団、来月の第一日曜で。大浦天主堂で演奏会。」

父「教会で歌うのか？」

稲森「お姉ちゃん運転中も歌とったよ。自分が出るわけじゃなかのに。」

母「伴奏で出るんよ。」

稲森「鶴と平和の歌。」

母「かわいかよ。子どもたちが白いセーラー服着てうたうの。お父さんも行く？」

父「そうねえ。カナミは？」

稲森「わたし行けない。英検だもん。」

父「日曜にか？」

稲森「うん。ちりんちりんアイス買ってこよ。お母さん食べる？」

母「うん。」

稲森「お父さんは？」

父「俺はよか。」

稲森「よかった。3つは持てないし。」

稲森、ちりんちりんアイスを買いに行く。

母「大浦天主堂正面にマリア像あるでしょ。その背中が好きなんだって。」

父「誰が。」

母「ミホ。」

父「ふうん。」

母「こんなに天気良くなるんだったら布団ば干してくればよかった。」

父「うちんサルスベリもこげな風になったらよかのに。枝が横に広がって。」

母「種類の違うとでしょ。」

父「だろうな。」